



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代の社会変動とDevelopment概念の変容 : マニラの経済開発と惨事便乗型資本主義
Author(s)	石岡, 丈昇
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 25-29
Issue Date	2014-12-05
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.6.25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57567
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12203623_06_25-29.pdf



現代の社会変動と Development 概念の変容

— マニラの経済開発と惨事便乗型資本主義 —

石 岡 丈 昇*

The transformation of the concept of development in the age of disaster capitalism:
From the case study on the gentrification in Metro Manila.

Tomonori ISHIOKA

1. マニラの台風と住居喪失

石岡と申します。今日は Development という概念を考えていくということで、宮崎先生から報告の依頼がありました。私としては、宮崎先生から、社会科学的な形で Development 概念を考えてみることを課題として出されていると思い、今日はそのように準備してきました。私は論理だけを先に走らせるということが得意ではなく、現場というかフィールドワークをしながら具体的に考えることをやっています。ですから、今日の報告もできるだけ事実的な話をしていきながら、最後にこれが Development にどう関係していくのかを述べたいと思います。

今日の発表は、マニラの話です。ここに一枚の写真があります。これは文学部の西尾善太君という学部生がフィリピンのことで卒業論文を書いていて、その彼が見せてくれた写真です。先日、フィリピンで大きな台風があって、レイテ島で非常に大きな被害があったヨランダという台風でした。その前の 2011 年に別な台風があったのですが、それがペドリンというものです。マニラ首都圏でも結構な被害が出て、この写真はそのペドリンの後の写真です。

私がこの写真を素晴らしいなと思ったのは、こ

こに杭があるんです。パッと見て分からない。この杭はなんだろうかというふうに見ると、要はこの杭の上には台風の前には家屋があったわけですね。ここは貧困地区ですので、土地の上は所有権が発生するけれども海の上は一応近代的な土地所有という面ではグレーゾーンなところもあるわけです。この写真は、杭があってその上に家があったんだけれども、それがなくなって今は杭だけが残っているという状況を撮った写真なんですね。しかもこのアングルで見ると、何故杭だけが残っているのかという疑問が生じます。普通に考えると杭の上にまた再建を遅しくおこなうのが普通なわけですし、これまでもそうだったわけです。しかし、この台風の後に、住民が家を再建しようとしたところ、「ここはもう建ててはダメです」ということで法的な規制が入られたわけです。もともと、ここは不法占拠地帯ですので、住民が勝手に建てたといえ、そうとも言える。しかし、これまでは黙認されていたわけです。それを台風後に、露骨にダメだという法的な枠組みができました。彼らは台風によって家を失うと同時に、自分たちが住んでいたところに戻る可能性を失いました。杭を見ていると、住民には自分たちが作ってきた生活であったり、暮らしであったりというのが、ある種懐かしかったりもするし、同時に

*北海道大学大学院教育学研究院

怒りも出てくる。微妙なノスタルジアと怒りの絡まり合いです。あるいは災害前であれば普通に住んでいたものが、災害後には取締りの対象となるという所がこの一枚の写真に凝縮されているわけです。それを西尾君は撮っているわけです。ですからこの写真のアングルと、ここに住んでいた人がそこには戻れなくなってしまったという思いみたいなものが、ここには映し出されているとも言えます。この点を足場にしながら、そこから Development というものは何なのかと考えようというのが今日の私の話です。

この写真の場所は、マニラ首都圏の中でも海沿いのナボダスという町です。漁業の加工が盛んな町で、一番海っぺりのところに暮らしている人たちになります。上から見た写真で、この辺は工場で密集度がそれほどでもないんですが、この辺は密集しているのが分かると思うんですね。海辺に貧困世帯の人たちが暮らしていた。こちら辺が台風で全部ダメージを受けてしまって、ダメージを受けた後戻れなくなってしまったということです。

こういった事態をどう問題化できるでしょうか。惨事が起きると、人権の保障や復興支援というものがいろいろ出てきます。惨事をすぐに「人権」、「支援」、「復興」という話とつなげてしまう前に、もうちょっと別な言葉とつなげて考える必要があるのではないかと、私は考えています。何と繋げるかということ、「経済」とつなげてみようというのが、今日のポイントです。何故惨事と経済がつながるのかということ、台風あるいは津浪の後に起こることは、今日の議論のポイントですが、復興という名の下に平時には遂行不可能だった都市政策や経済政策が登場することと関係しています。ある種の「どさくさ紛れ」なのです。どさくさに紛れて一気に、それまでには難しいかなと思われていた政策を、為政者の側がここぞとばかりに、ガッツと展開してくるようなことがあるということですね。その結果フィリピンでいうと、経済開発とかグローバル資本主義の関係の中で、大惨事を経済的なものに結合する力が登場するのがひ

とつのポイントです。

もう一つのポイントは、貧困者から見ると家が剥奪されるということですね。家が剥奪されるということは、単に物財としての家屋がなくなることではありません。家が無くなるということは、そこに住まってきた歴史であつたりとか、意味の総体が剥奪されることです。

別の話題になりますが、先日テレビを見ていてですが、北海道で閉校になる校舎を潰すという時に、ワラワラと関係者が集まってくる模様が放映されていました。校舎が無くなるということは、物財がなくなることではなくて、そこに通ったりそこに息子が行っていたりとか、記憶や意識や、そのような意味の総体が失われることに対する喪失感みたいなものがあるのだと思います。だから人が集まるのであって、ここにあるのは物財喪失ではなくて、ある種の自己喪失であつたりとか、そういうものがここにあるわけですね。ですから、惨事と一体になった経済的な開発みたいな問題が、実は社会的な弱者の自己喪失を促すのではないかということを、考えていきたいと思っています。

2. 「惨事」と「経済」の結婚

ここから事例に入っていきます。最初に、惨事と経済の接合という話をしたいと思います。マニラの経済開発は著しいものがありまして、特に2000年以降、ショッピングモールがものすごく増えました。モール・オブ・アジアというアジア最大のショッピングモールが2011年ぐらいに出来たのですが、最近、中国にもっと大きいのが出来てしまって、3位4位くらいになってしまいました(笑)。このようにマニラには、ものすごいショッピングモールがあるわけですね。その一方で、この写真はつい先月の2014年1月に起きたのですが、マニラでの貧困地区の強制撤去の風景です。冒頭に見せたものは台風で家が失われたものでした。これはブルドーザーで破壊していくという、人為的な家の剥奪です。こういうものがどう「経

済発展」とカップリングになっているのかを考えてみようと思うのです。

経済発展の方で言うと、ショッピングモールとか、ゲートッドコミュニティゲートで囲まれた高級住宅地です—とか、CBD というのは Central Business District と言ってこうしたビジネス中心街とか、とにかく開発が進んでいます。こうして、地価が「スカイロケットティング」な形で高騰しています。もう一方で、インフラ整備も進んでいて、高速道路の上にスカイウェイというのが出来上がって、高速道路の上に走っているんですね。料金は高いが渋滞がないわけです。第三世界の都市というのは渋滞が非常に問題なわけですが、スカイウェイを走れば値段は高いのだけれども早く行けるわけです。こうした現象が起きています。もう一つは、公共と民間のパートナーシップということで、多国籍企業とパートナーシップを組むことによって、海外からの資本をマニラの経済開発に使うということが起きています。

このような開発を進めるためには、難点も出てきます。中心市街地の用地を資本の側としては確保したいのだけれど、つまりこのようなゲートッドコミュニティを作りたいのだけれど、用地がなくなってくることが都市政策の側から問題化されるわけですね。また、投資のリスクを回避したいこともあり、都市政策者・為政者の側が経済特区を作るということも行っています。その一方で、都市構造全体が底上げされるわけではないから、数多い底辺労働力というか貧困層の人たちをどうするかということが政策的に課題になるわけですが、それはシンプルに軍事的に取り締まろうとします。その結果、この写真のように銃を持った人が、路上にガードマンとして配置される事態になっています。あと都市美化という名目で、治安の維持とかが新たな課題として謳われるわけです。

では逆に貧困層の側から見てみましょう。強制撤去をみると 2001 年では 2073 家族が強制撤去されたのですが、10 年後の 2011 年になると 14,744 家族になって、ここ 10 年間で 10 倍ぐらいになっ

ているわけです。一家族の構成員はだいたい 6 人から 7 人ですので、一年間で 10 万人ぐらいの人の家がホーム喪失者、家をなくしたという意味でのホームレスになったということですね。後はそういう貧困者を強制撤去することで物理的にも意識的にも排除していくことがあります。これは 2014 年 1 月に起きた強制撤去の写真です。こういう形で、現在住んでいる家を破壊していくわけで、破壊後は更地になって、ビジネスセンターが作られる予定になっているわけです。

強制撤去というのは、政治的・経済的なある種の緊張関係を生み出しますので、為政者からするとそれに伴う難しさもあります。ですが、惨事が起きるとそういうような緊張なしに、更地をまさに「自然」に作り上げてくれる。強制撤去のような政治的緊張関係を伴うことが若干緩和された形で、更地を手にすることができるとし、都市景観の美化を保つことができます。ミシェル・フーコーが 1970 年代に「社会は防衛しなければいけない」と言ったことがあります。フーコーはそこでセキュリティの話をしました。国民の生命を保障するのは国家の基本原理ですが、そうなんだけれども実は国民の生命を保障する、安全を守るセキュリティを守る名目のもとに、立ち入り禁止にするという形で逆に裏手にとった排除的論理が出来上がっている。惨事というのは起こったはずがないということではなく、むしろ惨事を待望するような国家が特に第三世界の中に出来上がっている。惨事は国家経営上の難題というより、それを心のどこかで待望するというのが現在のように思います。

支配の話を考えてみると、支配というのは力を所有することということより、そのもっと手前にはルールを作ることの方があって、これは、支配階級は Ruling Class、植民地支配は Colonial Rules と言いますよね。だから、支配は Domination よりもっと前に合って、ルール策定していく、新たなルールを策定して経済特区を作って立ち入り禁止にして何かの形で排除する。そういうふうなもののあり方が巧みに起こっているという

のがある。

3. 強制化された根こぎ経験

そういう中で、家を奪われていく側からするとどうことが起きるかなんですが、家が剝奪されていくわけですから、これは強制撤去の後ですけど、家を強制撤去された後、すぐ隣にわざと2日間でこれだけのものを作り上げて、私は非常に感銘を受けたわけですけども、2日間で作り上げたものを4日目には強制撤去されるわけです。家がなくなるということは house がなくなるのではなく home がなくなることです。home あるいは dwelling と言いますが、dwelling という意味の総体、歴史の総体としての自己と一体になった対象物が喪失されるという自己喪失の経験を非常に強いられるような事態でもあります。

理論的に整理しますと、若干飛躍しますが、マイケル・ポランニーという人が『暗黙知の次元』という本を書いたのですが、そこで「潜入」と訳された重要概念があります。杖をついているとその杖がだんだん自分の手の一部になる。そういうふうな関係にあることをポランニーは dwelling in と言って、それを訳すと「潜入」という意味になります。要は「住み込む」という意味ですね。「住み込む」ことによって、空間と自分との間に、自己と対象との間に、関係的なものができ上がってくるとポランニーは言っていたわけです。そういうような主体と環境との歴史化された関係の中に住まいというものがあるのですが、その住まいが暴力的に剝奪される過程があるわけです。単なる house の剝奪の話ではなく、自己喪失が強いられるような事態になるわけです。こういう例はいくつかあると思うのですが、例えば他の社会学者で言うと、カナダの M. マクルーハンが「身体の拡張」ということをよく言っています。部屋というのは自分の「身体の拡張」と言うわけです。それも、主体と環境の歴史化された関係を論じているわけです。あるいは、住民は

inhabitant、住居は habitat、習慣は habit、ブルデューが言う身体に住みついた習性のことを habitus といいます。ここは、inhabitant と habitat と habit と habitus との間の関係みたいな問題が家の剝奪には関わってきて、日本では避難住民という言い方をしますが、英語ではしないですね。避難住民は inhabitant ではなく population というふうに言われます。空間に住まっているのは inhabitant で、population は上から操作可能な人口のことですね。上から操作する形で、文脈から引き離して強制的になんとかするという形の貧民政策というものがあって、それは生活に根ざした空間ではなく、根こぎになった空間という意味で、さすらい人として、根こぎとして構造化していくような力がここにはあると思います。

4. 白紙待望型社会を超えて

まとめに入ります。こんな話が、Development 概念といかにつながってくるのかということですね。カナダのジャーナリストのナオミ・クラインが『ショック・ドクトリン』という本を書いて訳本も出しました。その中で惨事便乗型資本主義 (disaster capitalism) ということが述べられています。それは惨事に便乗して、平時には実行不可能だったいろんな難しい政策を政治的に上から強権的にやってしまうという話です。その重要なポイントは、為政者が「白紙」を待望していることです。社会状態の「白紙」を待望するわけです。ロックの言葉で言うとタブラ・ラサというのは、みなさんも聞いたことがあるかもしれませんが、人間というのは白紙のキャンパスがあってその中にいろんなものが書き込まれていくというときの白紙状態のことです。要は人間を初期化する、あるいは社会生活を初期化することですね。初期化することとはいろんな意味で政治的リスクというものがあるわけですが、惨事というのは、これを「自然」に起こしてくれるわけですね。そういう意味では、為政者の側からすると非常に魅力的な出来事です。ショックに伴った

形で白紙を作っていくということで、人間の面でも社会生活の面でも白紙を待望するわけです。その時に強制撤去と同時に自然災害というものを使った白紙の展開というものがあって、それをクラインは指摘したわけです。

開発主義は、従来の第三世界では顕著でした。開発主義とは、「経済的に遅れていたらいつまでたってもこの国は困るから、いろいろ不満はありますけれどもまずはみんなで力を合わせて経済的に離陸しましょう」というのが基本的な考え方です。そういう意味では国民統合を前提にしていたわけです。けれども、今の民主化以降のグローバル資本主義の中では、それが変容しました。国民統合を前提しなくなり、中間層のみを説得する手法に変わりました。貧困層に対しては露骨な軍事や強権的政策で統治することが出来上がりました。その意味では、全体統治型の支配ではなく、部分を恫喝していくような支配の形態に変わってきたと言えるかもしれません。

最後になりますけれども、台風や強制撤去で家を失ってきた人から現代社会を見てみると、開発について、違った形で捉え返すことができるように思います。開発あるいは開発主義についてよく言われていたのは、「開発が不十分だから貧困や社会問題が残っているのです」というロジックがずっと使われてきたと思います。「今は開発が不十分なんだ、もっと開発すれば社会問題はなくなります」とずっと言われ続けてきました。私は、これは違うだろうと思っています。そうではなくて、開発によって同時に生み出されるのが社会問題だと思うんですね。開発が不十分だから残存的な遺制として社会問題があるのではなくて、開発が社会問題を新たに作っていると考えていく必要がある。それはどのような社会問題かという、今でいうと例えば経済開発とそれに伴う根こぎの誕生ということであつたり、白紙を「自然」に作ってくれる惨事を政治的に利用した経済開発というようなものが起こっていると言えると思います。

最後に Development という今回の共通テーマ

とつなげて、結論を一言だけ言います。Development という概念は、たとえば発達心理学がずっとこだわってやってきたと思いますが、既存の人間なり社会生活から、どうやって質的にがらりと変わった新しいものが登場するかということを考えてきたんだと思うのですね。古いものなのけれども、古いものからどうやって新しい局面が出てくるのかということを考えるのが基本的な Development だと思います。しかしながら、今の白紙待望型の Development というのはそうではなくて、そもそも既存のものは無視してゼロ化してしまう。ゼロベースに白紙を作って、そこから新しいものをプラントするというふうな形の考え方で、Development というより Plantation 的なものだと思います。これを別の形で言うと、前の大阪市長がよく「グレート・リセット」と言っていました。「グレート・リセットする教育制度」とか。これも白紙を待望しているというか、ゼロベースで白紙のキャンパスを作ってリセットしてその上にプラントするというような発想です。それは既存のものから新しいものを作っていくという Development とは違います。グレート・リセット的なものが社会生活の面でも噴出する中で、もう一度当たり前ですけれども、既存のものからどうやって新しいものが質的に生まれるのかを考えることが大切であると私は思います。報告は以上です。

文 献

- 石岡丈昇, 2013, 「ブルデューの強制移住論——根こぎの形成をめぐる方法的予備考察」『理論と動態』6号
- クライン, N., 2011, 『ショック・ドクトリン——惨事乗型資本主義の正体を暴く』岩波書店
- 西尾善太, 2013, 「都市貧困と災害——フィリピン・ナボタス市の避難所を事例として」北海道大学文学部卒業論文
- ヴァカン, L., 2008, 『貧困という監獄——グローバル化と刑罰国家の到来』新曜社
- ポランニー, M., 2003, 『暗黙知の次元』ちくま学芸文庫
- マクルーハン, M., 1967, 『人間拡張の原理——メディアの理解』竹内書店